



近山スクール東京  
tokyo.school@chikayama.com

# 2007年9月5日 近山スクール東京ニュース No.10

共催：芝浦工大オープンテクノカレッジ/財団法人 日本住宅・木材技術センター

177-003 東京都練馬区富士見台 3-24-10 (事務局) tel 03-5971-2309 fax 03-5971-

E-mail:[tokyo.scool@chikayama.com](mailto:tokyo.scool@chikayama.com) URL:<http://tokyo.school.chikayama.com>

■■近山スクール東京の講座を受講した小川和夫さんのセルフビルドの現場を紹介します。■■

## 小川さんのつくるセルフビルドの家



写真 母屋から見た小川さんの家、奥は車庫

小川和夫さんは、大工でもなく、一級建築士でもない。家に関しては素人がセルフビルドする家。素人にできることと、プロに任せることを見極める確かな目を持って、設計はちゃんと一級建築士に頼み、基礎工事や木材は山形の金山杉、材の刻みと軸組みは山形の大工さん、基礎工事は地元の業者といった具合にプロの力も活用した。特に標高 1150 メートルの原村の林の中の凍結深度 90 センチという土地柄、基礎を深度 1 メートルまで掘ることは必要条件でした。粘土層の上にケヤキや榆の落葉広葉樹の落葉の堆積した層があるといった土地のため、地表から浸透した雨水が粘土層で止まり、境界面を走るそうです。地元の水道屋さんの助言に従い、基礎土台の山側に有孔パイプを埋め粘土層の上を走る雨水をブロックする“水抜き層”をつくり基礎を水から守る工夫をしました。一定の標高のある山には保水力があり、山全体がみずみずしく感じた。夏涼しいかわりに、冬の寒さは大変厳しい気候なので床下放熱暖房システムを導入。これは、近山スクール講師の安田滋さんの紹介したアイデアを採用した。居間には薪ストーブ、木製サッシに二重(ペア) ガラスを入れた。

水道(井戸)、屋根は地元の業者に頼みましたが、母屋以外の屋根は自分で葺き、電気配線も友人の電気工事屋さんとの共同作業、敷地の伐木も高所作業車をレンタルしてご夫婦で行いました。

小川さんは元商社マンで海外の駐在経験も長く、家のローンも終わり子供の独立したことを期に早期退職をして、第二の人生を出発しました。趣味を活かし子供の玩具、ブランコ、家具などは手作りして楽しんでいました。退職後品川の技術専門校、DIY アドバイザー科に通い、家造りの基礎的な知識を取得、どうせつくるなら木組みの家が作りたいたいとの思いが強くなりました。

そこでテニス仲間の建築家に設計を頼み、木材の調達、大工もそのついで山形の専門家に依頼しました。セルフビルドと資材や職人仕事の個別発注を組み合わせつつ、仕事で培った、豊富な管理者としての経験も活かしながら、有能な現場監督としても能力を存分に発揮しました。また、木工房の窓はすべて木工技術を駆使して製作した自作の木製サッシがはめられていました。クリ材の土台には、近山の講師の荒川さんのホウ酸で防蟻、防腐処理をしました。目標としては年内には家造りは完成させ、その後は趣味の木工を楽しみながら、キッチン周りやテーブルなどの家具を作って家を仕上げたいといわれていました。2006 年の受講生、永添さん、松田さん、事務局の北島の三人は外壁の杉板にホウ酸の防腐処理や野地板にも塗布のお手伝いをしてきました。



写真 居間からロフトを見る

■2006年の近山スクール東京の講座生■

## 山で見つけた一輪の花

### 素材生産者……原薫さん

松本から車で30分位山を登って行くと、そこは海拔1500メートルの地点に原さんたちの山の現



写真 原薫さん

はありました。まず、移動式の山小屋で、原さん、大滝さん、スイングヤーダ(ウィンチ付のバックホー)の運転を担当する高林さんたち3人は準備をしていました。森林組合の管理する村有林(現在は町村合併で財産区有林)、14ヘクタールのカラマツ林を3ヶ月で間伐する計画といます。この山の間伐は、1ヘクタールに1000本ある木を700本までに減らして、樹木の育成を促します。この森では、20年前に間伐して以来のことだそうです。その間伐材は建築用合板、沈床材、ガードレール、杭などの材料として使います。

山での原さんの仕事ぶりは、すでに間伐した木をウィンチのワイヤーにかけ、引き寄せて集積場所に積み上げます。その間、山の斜面を吊り上げられる木について移動し、集積場所では木の小枝などをチェーンソーで打ち、必要な長さに丸太切りしていきます。3人で息を合わせ、声を掛け合



写真 左から、原さん、大滝さん、高林さん

っての作業、しかも重機の動きを確認しながら、テキパキとした動作で作業を進めていきます。

写真 左から、原

気の抜けない緊張した空気に包まれますが、カラマツを渡る風は、木々や草の露にぬれたおいしい空気をご馳走してくれます。

神奈川県由市街地で育った原さんは、もともと環境問題に興味を持ち、大学で農業化学を専攻したのがきっかけで森林組合に働き、現在は柳沢林業で素材生産に携わっています。

近山スクール東京の受講生で、講座に参加している原さんから、素材生産に従事しているとは、とても想像しがたいことでした。山が好きで、しかも狩猟の心得も持ち、地元には根をはった生活を垣間見て納得しました。

地元のレストラン「食蔵」(ショックラバサラ)で、原さんが獲った鹿肉のステーキをご馳走になり、狩猟仲間の捕った天然鮎、地元の蜂蜜のアイスクリーム、フルーティーな地ビールに話は尽きなかった。人は自然の一部というが、山で素材生産に

携わり、明日の活力を地元の動植物から少し分けてもらう、自然と共生している生き方があった。山は荒れる一方で原さんの存在は、若い女性と



いうより、ぱっと開いた一輪の花。山に明るいイメージが広がりました。

●原さんは2007年飯能のフィールドツアーで丸太切りなど森林体験の指導を担当してもらいます。写真 チェーンソーで枝を打つ原さん

### § 編集後記 §

10月から講座が始まります。受講生はそれぞれの立場から、木造住宅の基礎を学びたいと参加されます。講師と受講生の交流の場を設けます。講座の内容を深めるためにも「交流の場」を活かして、同じ木造を学ぶもの同士、積極的にコミュニケーションの場として活用してください。